

2024年度 ソニー幼児教育支援プログラム
「科学する心を育てる」

にしくらあじさいプロジェクト

～見たい 知りたい 伝えたい～



芦屋市立西蔵こども園





目次



I	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	西蔵こども園が考える科学する心とは・・・・・・・・	1
III	実践報告	
	“伝えたい”から“伝え合い”へ・・・・・・・・	2
	あじさいまつり	
	①お店屋さんごっこ・・・・・・・・	10
	②にしくら からふるあじさいシアター・・・・・・・・	12
IV	実践からの考察・・・・・・・・	13
V	まとめと今後に向けて・・・・・・・・	14



I はじめに

西蔵こども園は、開園4年目の幼保連携型認定こども園である。1号認定児（幼稚園部）と2、3号認定児（保育所部）の総勢178名で過ごしており、職員は約60名という大規模園である。閑静な住宅街に位置し、遊歩道を通ると近くの公園や海（芦屋浜）まで安全に散歩に行くことができ、梅雨期には、園周辺にアジサイの花が咲き、園児や地域の人を楽しませてくれている。

開園当初は、園庭に一匹も虫がいない環境でのスタートから、今ではダンゴムシやアオムシなどの身近な生き物を自由に手に取ることができ、見たり触れたりすることを楽しんでいる。また、職員で力を合わせ理想の自然環境を目指して日々模索している。

今年度4月、異動等で職員の約三分の一が入れ替わり、新しいメンバーを迎えて教育・保育目標を話し合った。その結果、令和4年度から引き続き「思わず心がうごきだす ～みつけて、かんがえて、やってみよう～」を継続することとし、テーマも2年連続「レッツチャレンジ！」に決めた。芦屋市の保育理念「いのち」を大切に、生きる力の基礎を育む」を基に、思わず心が動き出すようなワクワクする保育環境を工夫し、保育実践していくことを改めて共通確認し今年度の保育をスタートさせた。



II 西蔵こども園が考える科学する心とは

2023年度論文の今後の方向性の中で、情報化社会やデジタル化が進んでいる今の子どもたちには、身の回りの出来事を豊かに感じ、心揺れ動く実体験が不可欠であること、また子どもも大人も「自分の気持ちを伝えることが楽しい」と感じる風通しの良い雰囲気これから大切に、協同的探究を実践していきたいと述べた。

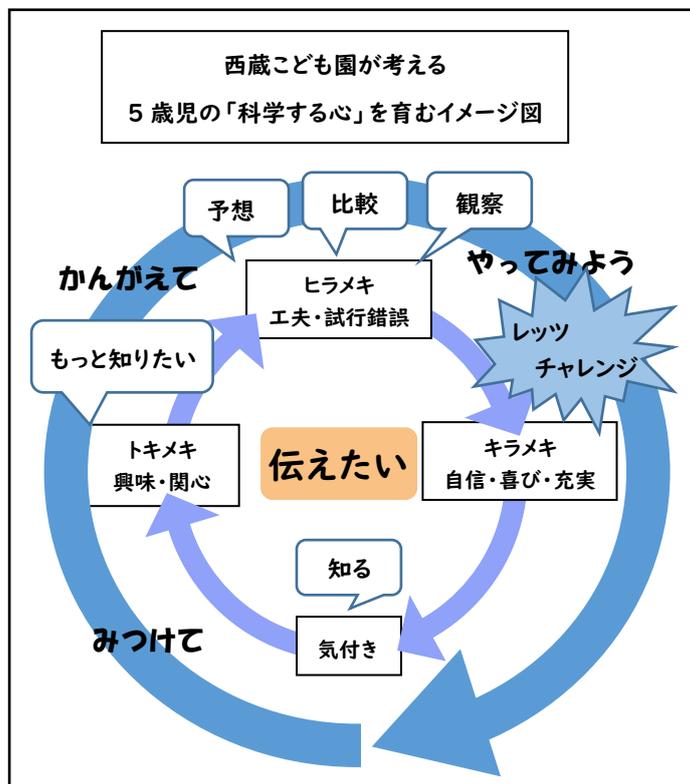
そこでまずは今年度の職員一人一人が「科学する心」をどのように捉えているのか、自分の思いをまとめて記述したものを基に話し合い、西蔵こども園としての科学する心について以下のように考えをまとめた。

「科学する心は遊びや生活の中にあふれており、素直に感じる心（感性）そのもの」である。物事に対して「これ何だろう?」と思った瞬間（好奇心）から、「科学する心」が動き出すのではないかと考える。そして科学する心の芽生えは「なぜ?」「どうして?」という“疑問”や、「こういうことかな?」という“仮定”などの「気づき」である。その気づきをそのまま終わらせるのではなく、自分なりの答えを導き出す面白さが科学する心につながるのではないかと考えた。また年齢が上がるにつれ「なんでだろう?」「不思議」という疑問から始まり、「見たい」「知りたい」「やってみよう」という気持ちへ発展していく。そして5歳になり、身近な環境に主体的に関わりながら、予測したり試行錯誤したりする。その中で生まれた「なぜ?」「どうして?」という課題（疑問）に自分なりの仮説を立て、自ら挑戦していく姿こそが、科学する心なのではないかと捉えた。

そして今年度は園として、人とのつながりが広がり、深まっていく5歳児（くじら組23名・らいおん組23名 計46名）が、感じたこと考えたことを「伝える」という活動を通してどのように『科学する心』とつながり、育っていくのかに焦点をあてることにした。

〈科学する心が育つには〉

- ①自分の思いを言葉で伝えることができる5歳児は「トキメキ ヒラメキ キラメキ」「みつけて、かんがえて、やってみよう」のスパイラルの中に、誰かに『伝えたい』という気持ちが随所に生まれることでより科学する心をスパイラルアップさせるのではないかと。
 - ②5歳児は生活や遊びの中で感じる「なぜ?」「どうして?」という疑問（課題）について「こういうことかな?」「こしたらどうなるのかな?」と自分なりの仮説を立てる。その仮説に向かって挑戦しようとする「レッツチャレンジ」の気持ちが科学する心を育てるのではないかと。
- 以上の2点を基に、実践から検証することとした。



昨年度の5歳児はツバメが西蔵こども園にも来てほしいという思いから、園内にツバメの人工巣を設置した。ツバメの巣を見守ることとともに、梅雨期にきれいに咲くアジサイに『にしくら からふるあじさいどおり』と命名し、地域の人に親んでもらえるように看板を立て今年度の5歳児へ『にしくらあじさいプロジェクト』として引き継いでいた。

今年度の5歳児は日頃から身近な自然に関心をもっており、春から毎日ダンゴムシやテントウムシを見つけて飼育することを楽しんできた。しかし、好きなあまり虫を触りすぎて死なせてしまうこともあり、虫(相手)の気持ちを思ったり考えたりすることが課題であると感じていた。また生活の中で受け身な姿も見られ、困ったことを自分から発信したり、考えて工夫したりすることが苦手なようであったため、学年の仲間と試行錯誤しながら、主体性を育てていきたいと学年目標にかかげて4月をスタートした。



“伝えたい” から “伝え合い” へ

事例1. 「好きなもの探し」 5月15日(水)

「(ツバメの人工巣に) 糞とかエサの虫を入れていたら来るかな?」と西蔵こども園にツバメがやってくることを待ちながら園内で自分の好きなもの探しをしていると、様々な種類の花が咲いていることに気付いた。さらに、“にしくら からふるあじさいどおり”を見に行くと、大好きな四つ葉のクローバーや虫を探す子どもが多い中「アジサイが好き」と声に出す子どもが数名いた。それを聞いて「それも好き好き」と賛同する子どもも多く、タンポポやクローバーと同じようにアジサイもよく知っている身近な花という印象であった。アジサイに興味を示す子どもがいる中で、A児は担任からの「アジサイきれいだね」という言葉かけには反応せず「虫かごちょうだい、バッタおるねん」と虫探しに夢中になっていた。



事例2. 「アジサイにもいろんな種類があるんだね」 5月23日(木)

この日も、“にしくら からふるあじさいどおり”へ探検に行った。アジサイをよく見てみると、アジサイの蕾や葉っぱの違いから種類によって咲き方が違うことに気付く子どももいた。また、以前の探検では気付かなかったアジサイのネームプレートを見つけ「アナベル」「セイヨウアジサイ」「ガクアジサイ」「ヤマアジサイ」の4種類あることが分かった。しかし「これもアジサイ?」と形が全く異なるネームプレートのついていない花を見て、不思議そうに子ども同士で話していた。すると翌日、登園するなり「あのアジサイの名前わかった!」と嬉しそうに話す子どもがいた。すぐにみんなで集まり、タブレットで撮影した花の写真とともに「これはカシワバアジサイって言うんだよ」と教えてくれた。それを聞いていた子どもは「あれもアジサイなん!？」と驚いていた。



<子どもの姿からの読み取り>

はじめの頃は一括りにアジサイという花を見ていた子どもたちが、様々な種類があること、形や色が異なることを知ったことで子どもたちの心が一步動いたと感じる瞬間であった。それと同時に、保育教諭の心も動かされた。また、名前のわからないアジサイに出会ったことから、そのアジサイの名前を“知りたい”と思ったり、蕾が色づいていることに気付き花びらの色を考えたりするなど関心が深まり始め、さらにはそこから“伝えたい”という思いが生まれていることがうかがえた。

<保育教諭の思い>

今年度、身近に親しめる虫から引き継いだツバメの巣とアジサイに親しんでいく中で、園にはやってくるのがなく、散歩の時にだけ見られるツバメよりも毎日目にして変化を感じられるアジサイへの興味が膨らんでいった。今回、芽生えたアジサイへの『きれい』という興味が『不思議』という探究心になっていくのを感じた。

事例3. 「アジサイはどうやって咲くの？」 5月29日(火)～30日(水)

アジサイはどんなふうにかについてクラスで話題になった。すると「まず芽が出て蕾になって、花が咲くんだよ」「チューリップと同じだよ」と予想する子どもがいたため、みんなで確かめることになった。そこでどのように確かめるかを話し合うと「毎日見に行く」という意見や「写真を撮る」という意見が出てきたため、毎日アジサイを見に行きタブレットでも写真として残し、アジサイの変化を継続的に見ていくことにした。グループで1つのアジサイを選ぶよう伝え、花がついているものや花がついていないものを選びリボンで印をつけた。花がついていないアジサイを選んだグループに話を聞くと「花が咲くところをはじめから見てみたい」とのことだった。



アジサイの写真を撮り始めて2日目、早速観察していた子どもから「何色の花が咲くか分かったよ」と報告があった。「なんでわかったの？」と保育教諭が尋ねると「蕾をよく見てみると、紫とピンクになってるから」と嬉しそうに答えていた。他にも、改めて観察していると選んだアジサイとほかのアジサイの形が違うことに気付き、これまではアジサイに関心が向いていなかった子どもも「アジサイってすごいね」と感動していた。

事例4. 「あじさい探検 ～西蔵集会所～」 5月31日(金)

アジサイに興味をもち始めた子どもたちが西蔵こども園の近くにある西蔵集会所へ探検に行った。西蔵集会所を自由に探検していると、A児から「これ見て、ダブル!」という声が聞こえてきた。保育教諭が「ダブルって何?」と問いかけると「青と紫の2つの色の花びらがあるからダブル!」と名付けていた。さらにB児は、アジサイをよく見て、蕾からとげのようなものが生えていることに気付いた。また、見つけたアジサイを撮影し、園に戻りプロジェクターにつないで拡大して見てみると、C児やD児は「模様がバツになってる!」「これは3本の線!」と蕾に模様があることに気付いた。そして「いろんな違いがあって面白いね」という声も上がっていた。



ダブルのアジサイ



D児が描いた
3本の線のアジサイ

アジサイに囲まれた集会所では子どもたちも思わず「いっぱい!!」と目を輝かせ様々なアジサイを見つけて喜んでいた。保育教諭と子どもとの会話の中で「いつからこんなにアジサイでいっぱいだったのかな?」とつぶやくと「それなら聞いてみたらいいんだよ!!」とアジサイの手入れをしていた集会所の方に駆け寄って「どうしてこんなにアジサイがいっぱいな?」と聞きに行っていた。その問いかけに「20年くらい前に勤めていた方が少しずつ増やしていったんだよ」と答えてくださり「どうやって増やしたの?種?」と再び聞き返していた。すると「挿し木と言って、茎を切って水につけたら茎の先から根っこが出てくるからそれを土に植えて大きくしたんだよ」と丁寧



に教えてくださった。

＜子どもの姿からの読み取り＞

A児やB児のつぶやきから、アジサイを見つける楽しさや新しい発見をする喜びを感じ、心が動いていると読み取れる。特にA児は虫が大好きでアジサイにほとんど興味を示していなかったが、今まで見たことのない青と紫の2色のアジサイ（ダブル）に出会ったことで、大きく心が動いていると感じる。また西蔵集会所のたくさんのアジサイの美しさに心を動かされたからこそ、今まで受け身だった子どもたちが自分から思わず西蔵集会所の人に聞きに行ったのではないかと考える。

＜保育教諭の思い＞

子どもたちはこれまで経験したことのある種植えや苗植えとは違う挿し木の方法について、不思議そうにはあるがよく聞いていた。子ども自身が聞いたことをどのように受け止めて、表出してくるのか今後の期待を込めてもうしばらく様子を見守ることにした。この時、西蔵集会所の人に聞いて挿し木の方法を知った経験は、今後の子どもたちの活動にとって大きな転機となった。

事例5. 「いいこと聞いちゃった！」 6月3日（月）

6月2日（日）に、西蔵集会所で地域のあじさい祭りが行われ、両親と参加したC児は登園してすぐに「いいこと聞いちゃった！」と嬉しそうに報告しに来た。「なになに？」と聞くと、「実は西蔵集会所はもともと牧場だったんだって。牛やにわとりを飼ってて、そのウンチやオシッコが土の栄養になって、きれいなアジサイが咲いたんだよ」と発表してくれた。それを聞いた子どもたちも保育教諭も「え～！あそこに牛がいたの！？」「ウンチやオシッコが栄養になるの！？」と驚いていた。



＜保育教諭の思い＞

保育教諭も、西蔵集会所にはどうしてきれいなアジサイがこんなにたくさん咲いているのか不思議に思っていた。そしてC児の話聞き、その理由が牛のウンチやオシッコが栄養になっているからだと分かり、子どもたちと同じように「そうだったんだ！」と驚き歴史を感じた。地域の人から知らないことを教えてもらい子どもとともに喜んだ。



事例6. 「好きなところを“伝えたい”」 6月3日（月）



くじら組は芦屋市内へ探検に行った。すると、ある子どもが民家の前に咲いているアジサイを見つけ「ハートの形あった！」と嬉しそうに話した。この日は初めて見るアジサイがたくさんあり「このアジサイの色が好き！」「この花びらがかわいい！」と自分の好きなアジサイを見つけて楽しんでいた。自分の好きなアジサイを撮影し、タブレットの機能を使って好きなところに印をつけて「帰ってから見せ合いっこしよう」とお気に入りの写真を見せ合うことにした。



花びらの数や形が違う

園に戻りプロジェクターで映して見せ合い、好きな部分を拡大するとA児は「あれ？色は似てるけど花びら（数や形）が違うやん」と細かい違いにも気付いていた。

ツノが生えている



らいおん組は、西蔵こども園にあるアジサイの中から自分のお気に入りのアジサイを選んで撮影し、プロジェクターを使ってみんなの前でお気に入りのポイントを発表した。「丸いところからニョキニョキっとツノが生えているところ」と気付いたことを伝える子どももいた。また、子どもの発表に合わせてお気に入りのポイントに赤線で○を描いたり拡大したりしたことで、見ていた子どもたちも「ほんまや！」「すごい！」と共感するこ

とができた。

<子どもの姿からの読み取り>

ICT機器を取り入れ、画面を通してその気付きに注目することで、一人の発見をみんなで楽しみ共感することができた。また様々な種類・形のアジサイがあることを知り「アジサイが好き」という気持ちが高まっていった。子どもによって見る視点が異なり、一人一人が見つけたことをすぐに誰かに「伝えたい」という思いが強くなっていると感じる。それらを言語化して「伝える」ことで気付きをみんなで共有し、一人では気付けなかったことを知る喜びを感じていた。

事例7. 「あじさい探検 ～精道こども園～」 6月4日（火）

引き続き芦屋市内のあじさい探検へ行き、精道こども園の前を通ると、きれいなガクアジサイとセイヨウアジサイが咲いていた。西藏こども園とは少し色味が違い「この色（西藏こども園には）ないね！」と子どもたちが話している中、A児が「折って持って帰ろう」と話す。驚いた保育教諭が「折るの!?なんで!?!」と聞き返すと「前に言ってたやん。アジサイを折って水につけたら根っこが出るって。これもこども園に植えて育てたい」と話す。「でも勝手にもらえないから、こども園に帰ったらもらえるか相談してみよう」と、園に戻るとA児がさっそく園長を見つけて「精道こども園で好きなアジサイを見つけて育てたいから、精道こども園の先生に電話して（ほしい）」と伝えた。

<子どもの姿からの読み取り>

市内のアジサイ探検を通してこども園にはない沢山のアジサイを見て「育ててみたい」という気持ちが芽生え、「やってみたい」という思いが膨らんだのだと考えられる。以前西藏集会所で教えてもらった挿し木のことを聞いて、A児なりにアジサイは茎から育てることが出来ると受け止めていたのだろう。他の場所でも「育ててみたい」と思っていたのかもしれないが、精道こども園で知っている先生に出会った安心感から「ここならもらえるのではないか」という思いに繋がったと考えられる。

事例8. 「どんな仲間に分けられるかな」 6月5日（水） 参観日

参観日にあじさい探検で見つけてきたアジサイの写真をカードにしてグループごとに仲間分けをする。「僕は青を集めるから、〇〇ちゃんはピンクを集めて」と色の種類で分けるグループもあれば「このアジサイはまんまるだけど、こっちのアジサイは真ん中がつぶつぶだね」とアジサイの形の違いについて伝え合い、仲間分けをするグループもあった。保護者も「アジサイってこんなにいっぱい色や形があるんだ!」と感動しながら子どもたちのそばで様子を見守っていた。



<子どもや保護者の姿からの読み取り>

たくさんのアジサイカードを見て、保護者もアジサイに出会った当初の子どもたちと同じように種類の多さに驚くとともに、友達と話し合いながらアジサイカードのグループ分けを考える姿に成長を喜んでいました。また、子どもたちも保護者の前で発表し、聞いてもらうことで喜びや自信に繋がったと感じる。

事例9. 「アジサイが欲しい」 6月5日（水）

参観後にA児は園長から「今から精道こども園に自分たちで電話してみる?」と言われてもらい、精道こども園とビデオ電話をすることになった。A児は「精道こども園に電話することになったよ」と、くじら組とらいおん組に報告した。その後、遊戯室



で精道こども園とビデオ電話をし、画面越しでアジサイを映してもらいながら、みんなで選んだアジサイに目印としてリボンをつけてもらった。電話をした後「早く精道こども園に行きたいな～」とアジサイをもらいに行くことを楽しみにしていた。

事例10. 「本当のお花じゃないんだよ」 6月6日(木)

朝、登園したD児が「アジサイの蕾から出ているツノが、本当のお花なんだよ」と保育教諭に教えてくれた。「じゃあ、周りにある花びらはお花じゃないの？」と問い返すと「うん、あれはガクっていうんだって」と答えた。「え！先生知らなかったわ」と保育教諭が驚いていると「みんなにも伝えたい」と、得意げな表情だった。D児が朝の会で伝えると「え、そうなの!？」と他の子どもたちも驚いていた。また、D児から教えてもらったことをいかにも自分が調べたかのように嬉しそうに友達や保育教諭、家族に話す子どももいた。



事例11. 「コンポストって知ってる？」 6月6日(木)

西蔵集会所で牛のウンチやオシッコが土の栄養になることを知ったB児が「西蔵こども園でも栄養のある土を作りたい」と、家でコンポストを作っていることを紹介してくれた。しかし、保育教諭が「西蔵こども園には西蔵集会所のような牛のウンチやオシッコはないなあ」とつぶやくと「ダンゴムシコンポストとかミミズコンポストもあるよ」と教えてくれた。西蔵こども園にはダンゴムシもミミズもいるため、みんなで「じゃあ作ってみよう」とコンポストづくりが始まった。



事例12. 「レッツチャレンジや！」 6月7日(金)

ビデオ電話でリボンの目印をつけたアジサイを精道こども園にいただきに行く。その他にも、実際に見て欲しくなったアジサイももらえることになり、喜んでいて。しかし、事前にビデオ電話で見て選んでいたアジサイの中の1本は、花が折れてしまっていた。アジサイがもらえることを心待ちにしていたA児はそれに気付いて落ち込み「折れてるならいらない」と話す。落ち込むA児の姿に「もしかしたら折れてるアジサイからも根っこが出るかもしれないね」と保育教諭がそっと声をかける。すると、気を取り直したA児が「それならレッツチャレンジしてみようかな…」と友達に話し、こども園に持ち帰りクラスで大事に見守ることにした。

事例13. 「アジサイがかわいそう…」 6月14日(金)

西蔵こども園の前身で今は使われていない旧新浜保育所に探検に行った。この学年のうち9人は0.1歳児の時にここに通っていたため「ここに行ってた」と嬉しそうな子どもがいた。中を探検しているとガクアジサイや西蔵こども園にはないきれいな青い色のセイヨウアジサイ、そして今まで見たことのないアジサイを見つけ「きれい」と感動していた。しかしよく見てみると、ところどころ枯れていて元気がないように見えた。「なんで元気がないのかな？」と問いかけると「誰もお世話をする人がいないから」「かわいそう」「さみしそう」とアジサイの気持ちになって真剣に考えていた。また、F児から「みんなでここに住んだらいいやん」という声が上がったが「住めたらいいよね。でもここはもうお水出ないのよ」と保育教諭は答えた。すると「西蔵こども園に連れて帰ろうよ」という意見が出たが、引っ越しをするための方法がわからなかった。子どもたちは「いつか必ず迎えに来るね」「ちよっと待っててねー!」とアジサイに約束し、こども園に帰った。



こども園に帰ってから職員に聞いて回ったがアジサイの移植がわかる職員はおらず、園長に尋ねたところ芦屋市

緑の相談所の佃さんという方を紹介してもらった。そして、後日西蔵こども園に来園して下さることが決まった。

〈子どもの姿からの読み取り〉

これまでは、アジサイについて気付いたことや調べてきたことを“伝えたい”と保育教諭や友達に伝えることが嬉しかった子どもたちだったが、この日は『水が出ない無人の施設でひっそりと咲いているアジサイ』を思い心配していた。そしてみんなが枯れたアジサイ（相手）に想いを寄せたことで、「お世話をしてもらえない」「かわいそう」「連れて帰りたい」と、“伝えたい”から“伝え合い”へとステップアップした瞬間だったと感じる。

事例14. 「あじさい博士に聞いてみよう」 6月18日（火）

～芦屋市緑の相談所の佃さんに教えてもらったこと～

① アジサイの歴史について

アジサイは現在2000種程あるが、もともと江戸時代から日本に咲いているもの（ガクアジサイ）と、日本に咲いていたアジサイがヨーロッパに行き、新しい品種となって日本に戻ってきたもの（セイヨウアジサイ）、アメリカに咲いていたもの（アナベル）がある。

②旧新浜保育所のアジサイの引っ越し方法（挿し木・株）と時期について

【挿し木】 湿度が高い6～7月中にする。

【株】 アジサイが休眠期に入る11～12月に掘り上げて引っ越しをするのが良い。



ダンスパーティー

③挿し木の方法について

- ・今年伸びた緑色の枝を選び、ハサミで切る。
- ・水に1時間つける。
- ・一番上の葉っぱを半分に切り、それ以外の葉っぱは取る。
- ・茎の切り口に粉（発根促進剤）をつけ、土に植える。



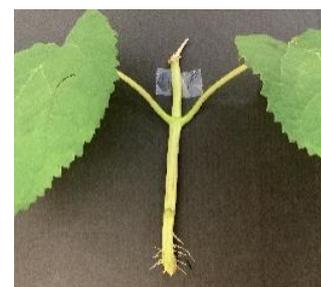
④アジサイのお手入れについて

- ・7月末のアジサイが咲き終わった頃に花を切り落とす。

そして、佃さんは自宅から持ってきたアジサイで挿し木の方法を教えてくださいました。そのアジサイを見て子どもたちは「あ！見たことある！」と、旧新浜保育所で初めて見たアジサイと同じであることに気付いた。佃さんはこのアジサイの名前が“ダンスパーティー”という名前であることを教えてくださいました。聞いたことのないなんとも楽しそうな名前のアジサイに、子どもたちは「かわいい名前！」と嬉しそうな表情であった。

事例15. 「根っこが出てる！！」 6月20日（木）

精道こども園でもらったアジサイを水に挿して根っこが出ないか見守ってきた。ふと見るとアジサイの茎から白い糸が出ていることに気付く。「えっ！これ根っこちゃう？」「出たー！！」と喜ぶ子どもたち。何人かの子どもは「一番下（茎の切り口）から出てないからこれは根っこではないんじゃないか」という疑問を浮かべていた。しかし、それを聞いた、根っこだと思っている子どもは「最初に水に入れた時にはこんな糸は出ていなかった」と考えを互いに伝え合っていた。これがアジサイの根っこであることがわかり、さらに最初に根っこが出てきたアジサイは花が折れてしまっていたアジサイ（事例12）だったことで一層興奮していた。A児はこの結果に「やってよかったー！」と満面の笑みを浮かべ、レッツチャレンジが成功したことを喜ぶ瞬間だった。



事例16. 「アジサイの変化」 7月3日（水）

雨が続き、しばらく“にしくら からふるあじさいどおり”を見に行けていなかったため、久しぶりにアジサイを見に行くことを楽しみにしていた。アジサイを見に行く前は「雨がたくさん降っていたからきれいに咲いている」と予想したG児だったが、見に行ってみると白色だったアナベルが黄緑色になっており「枯れてる…」と驚いていた。また、G児はそのアナベルを触ってみると「白いの（枯れていないアナベル）と比べるとカサカサしてる」とつぶやいた。それを聞いたC児はアナベルに鼻を近づけて「匂いがお寺みたい」と伝えた。さらにそれを聞いたH児は「白いのと比べてみよう」と触り比べ「白いのはツルツル」と感触の違いに感動していた。さらにH児は茶色いアナベルも見つけ「これが枯れてる。黄緑のアナベルはまだ（枯れる）途中だ」と伝え合っていた。

〈子どもの姿からの読み取り〉

子どもたちは久しぶりに見たアジサイの変化に驚いていた。この場面でも、子ども同士で見た目の変化だけでなく、諸感覚を通して感触や匂いの違いに気付き「伝え合っ」ていた。さらにH児の「黄緑のアナベルはまだ（枯れる）途中だ」という言葉から、継続的にアジサイを見たりアジサイ同士を比較したりしたことで「白→黄緑→茶」の順番で枯れていくと自分なりに予想したと考えられる。

〈保育教諭の思い〉

これまでICT機器を用いながら継続的にアジサイを見てたくさんの方に気づき、アジサイの好きなところを自分なりに伝えてきた。今回、外部から講師を招きにしくらあじさいプロジェクトについて公開保育で助言をいただく機会があった。その際に、「伝える」という活動においては、ICT機器を取り入れることで視覚や聴覚で感じたことは伝わりやすいが、触覚や嗅覚の情報は伝えづらいということを教えていただいた。その助言を聞き、子どもたちの知ったことや気付いたことを余すことなく受け止めていたつもりだったが、アジサイを触って「ふわふわしてる」と手の平で感じ、「なんだかいい匂いがする」と匂いを嗅いで感じるような、五感を通じた気づきや感動の重要性を忘れてしまっていた。

今回、改めて“にしくら からふるあじさいどおり”を見に行くと、匂いや感触など感覚を通じた新しい気づきが今まで以上にたくさん得られた。「カサカサしてる」や「匂いがお寺みたい」という感覚を通じた気づき（感動）は子どもの経験から絞り出される子どもらしい独特な言語で表現されるため友達にも伝わりやすく、子ども同士の「伝え合い」がより発展したと考えられる。

事例17. 「実験してみよう」 7月11日（木）

落ちてしまったアジサイの花を見た子どもが「捨てるにはもったいない」とつぶやいた。「枯れたアジサイどうする？」と子どもたちに相談すると、E児が「茎を切って色水につけると色が戻るんじゃない？」と提案した。そこで、どんな色になってほしいのかを聞いてみると「青」「ピンク」「赤」「虹色」という声が上がった。単色の色水を作った後に、保育教諭が「虹色ってどうやって作るの？」と問いかけると「全部入れたら？」という声上がる。そこで持ってきた絵具を少しずつ混ぜることにした。混ぜる前にどんな色になるのかをみんなで予想すると「虹色」と答える子どももいれば「グレー」「黒」「茶色」と暗い色を予想する子どももいた。そして1色ずつ混ぜていくと虹色ではなく茶色になったが「ココアみたいでおいそうな色になった！」と喜んでた。

作った色水をプラスチック製の透明なコップに入れ、中に入れるアジサイをどれにするか、子どもと一緒に考えた。すると、子どもから「花の色が白いほうがいいよね」という意見が出たので、保育教諭が「どうしてそう思うの？」と問い返すと「だって色がつづくのが見やすいやん」と答えた。アジサイを入れる時には「どうなるかな？」と子どもたちも大人も楽しみにしていた。



数日間は色水に入れたままにし、毎日子どもたちと一緒に「あれ、ちょっと青くなってる?」「なってないよ、もともとだよ」「茎の方は色ついてるよ!」とワクワクしながらその変化を見ていた。

〈保育教諭の思い〉

結果として、花の色は変わらず、子どもの言うように茎には確かに色水の色がついていたが、E児の予想していた結果にはならなかった。しかし、「やってみよう」と挑戦したこと、他の子どもも「どうなったかな?」とワクワクしながら結果を予想し「伝え合う」ことを楽しんでいた。後日、職員が絵具ではなく水性インクを使って実験してみると、花に色がついているのを確認した。子どもたちには今回色が変わらなかった経験を、大きくなってから思い出して再挑戦してほしいと願っている。

事例18. 「アジサイの花びらでアジサイを作りたい」 7月11日(木)

枯れたアジサイの花が「もったいない」と思った子どもたちに、アジサイを使ってどのようなことをしたいのか聞いてみると「アジサイの花びらを使ってアジサイを作りたい」という子どもがいたので制作をすることになった。一人用の小さい画用紙(四つ切)とみんなで作れる大きな画用紙を用意し、作り始めた。アジサイの花びらを1枚1枚貼り合わせる子どももいれば、枝がついたまま貼ろうとする子どももいた。I児は「一人だけ大きな画用紙で作りたい」と、アジサイを枝のままのりで画用紙につけようとするが、上手く貼れずに困っていた。しばらく見守っていると「そうだ!」と言ってアジサイの葉っぱを茎の上に貼り付けて固定していた。また、I児は途中で「雨降らせたい」と保育教諭に相談に来たので「いい考えだね、どうやって雨を降らせる?」と問い返すと、「んー、絵具と筆!」と答え、スパッタリング(絵具を飛び散らす技法)で雨を表現していた。



事例19. 「アジサイのお家をつくろう!」 7月12日(金)

旧新浜保育所へアジサイを取りに行くために、挿し木用の土づくりをする。子どもたちに家から空のペットボトルを持って来てもらい「自分だけのアジサイのお家を作ってみよう」と伝えると「早く作りたい!」と楽しみにしていた。保育教諭が試していた2種類のアジサイの挿し木を4人ずつ順番に見てみる。見に来た子どもたちから「土の大きさが違うね」「土の色が違う」「こっちは枯れてるね」と、2つの挿し木を見比べて感じたことをつぶやいていた。また「こっちは根っこが出る」とアジサイの茎に生えている根っこに気付く子どももいた。

今回の挿し木で使う鹿沼土について、この土は西蔵こども園では取れない特別な土でありアジサイの挿し木に適していることを伝えた。さらに、植木鉢の底に敷く石は自分たちで園庭に取りに行き準備した。なぜ鹿沼土と石の2種類を使うのかについて子どもたちに問いかけると「空気が出るように」「水が出るように」とその理由を考えていた。そして、土と石の分量も子どもたちがそれぞれで考え、自分だけの植木鉢を作り、旧新浜保育所のアジサイを迎えに行くことを楽しみにしていた。



〈保育教諭の思い〉

挿し木から出る根っこに気付けるように透明のペットボトルを使用した。また、一人一人がこのアジサイの引っ越し(挿し木)の主役であることを実感してほしいという思いから、今回は一人ひとつの植木鉢づくりをするようにした。

〈子どもの姿からの読み取り〉

保育教諭が挑戦した挿し木を4人ずつで見ること、それぞれのつぶやきが自然と共有され、「伝え合い」が生まれたと考える。また、自分で分量を考えて入れることで、自分だけの植木鉢づくりを楽しんでいた。

事例20. 「挿し木にレッツチャレンジ！」 7月16日（火）

旧新浜保育所へアジサイを迎えに行く。事前に旧新浜保育所で見つけた3つのアジサイ（ガクアジサイ・セイヨウアジサイ・ダンスパーティー）の中から、子どもが自分でどのアジサイを挿し木にするのかを決め、アジサイごとにグループに分かれて出発する。旧新浜保育所に到着すると、すぐに「あれ、なんか変わってる」という声が上がった。保育教諭が「どこが変わった？」と問い返すと「前はきれいな青色だったのに茶色になってる」とアジサイが枯れていることに気付いた。

アジサイの枝を切る前に、挿し木をするためにはどの枝を選べばいいか子どもたちに尋ねると「元気な枝」「太い枝」「細長い枝」と様々な意見が出た。

アジサイを選び終わった子どもがアジサイを見ていると、J児とK児が「赤ちゃんがいる！」と驚きの声を上げた。見てみるとアジサイの枝の上部に小さな葉っぱが出ていた。園に戻って挿し木をする際にこのことを紹介すると、他のアジサイのグループでも気付いた子どもがいたので、これが「新芽」という名前であること、そして新芽が出ているのは元気な枝の証拠であることを伝えた。



新芽を見つけた子どもたち

こども園に戻り、早速アジサイの挿し木に挑戦した。アジサイ博士の佃さんに教えてもらったことを振り返りながら、挿し木の手順を確認した。そして、自分で葉っぱを半分に切り、佃さんにいただいたアジサイが元気に育つ薬（発根促進剤）をつけ、アジサイの赤ちゃんがついた枝を自分のお家に入れると「大きくなってね」と期待と喜びに胸を躍らせていた。

事例21. 「新芽を育てたい！」 7月17日（水）

昨日、アジサイの挿し木をする際に見つけた新芽を見て“にしくら からふるあじさいどおり”のアジサイにも赤ちゃんがいた」とA児がつぶやく。「この赤ちゃんを大きく元気に育てるためにはどうしたらいいだろう？」と保育教諭が問いかける。すると「佃さんが枝チョッキン（と花を切り落とす）って言ってた」「花に栄養が取られるから枯れた花も切るって言ってたよ」と佃さんに教えてもらったことを思い出す子どももいた。そして、新芽に栄養がしっかりといくために花を切り落とし、栄養（肥料）を与えることになった。

子どもたちにとってアジサイの栄養といえば西蔵集会所で聞いた牛糞のイメージが強く、園で牛糞肥料を見つけた子どもたちは「あった！」と大喜びしていた。花を切り落とした後、園にあった牛糞・腐葉土・油かすの3種類を別容器に入れて名前を伏せ、どの肥料かを当てるクイズをした。すると真っ先に「これが牛のウンチャ！」「だって色がウンチャみたい」「ウンチャの塊がある」「くさい」と視覚や嗅覚、触覚を使って考えていた。肥料を自分なりに選んで分量を考えて配合し、アジサイの根元に撒く際「大きくなってね」と声をかけ「どんな花が咲くかな？」とアジサイの生長に期待を膨らませていた。

※8月末現在、挿し木にしたセイヨウアジサイは順調に根っこを伸ばしている。2学期の間に、子どもたちの挿し木を地植えし、旧新浜保育所で待っているアジサイを株ごと“にしくらからふるあじさいどおり”に移植する予定である。



根が生えた挿し木

あじさいまつり 6月13日（木）～7月9日（火）

①お店屋さんごっこ

西蔵集会所で行われた“あじさい祭り”の話になり、当日に行くことのできなかった子どもたちが「あじさい祭り行きたかった

な」とつぶやいていた。するとそれを聞いた子どもが「西藏こども園でもしようよ!」と提案し、みんなで「それ、いいね!」「楽しそう!!」と、「にしくら からふるあじさいまつり」を開催することにした。

早速「おまつりって何?何をやる?」という話になる。「やきそば!」という L 児の言葉から「おまつりにはお店屋さんがいっぱいあるよ」「それならみんなを呼びたいね!!」と自分たちだけで楽しむのではなく、こども園の小さいクラスの友達も呼んで楽しませてあげたいという気持ちが膨らんでいく。「あじさいまつりだから、アジサイのお店にしたらみんなもアジサイが好きになるんじゃないかな」「それいいね!」「みんなにもアジサイを好きになってほしい」と小さいクラスの友達も喜び「アジサイのお店屋さん」をすることになった。

普段は物静かな M 児が「おまつりだったら、ヨーヨーつりかな」とポツリと小さな声で言う。それを聞いた隣の子どもが「アジサイのヨーヨーかわいい!」と言い「絶対それしよー!」とみんなで盛り上がる。他にも「アジサイのやきそば?」「ちょっとおいしくなさそう...」「カシワバアジサイがソフトクリームみたいな形だからあじさいアイスクリームは?」「そっちのほうがおいしそう」と子どもたちで考えたことを伝え合い、何のお店にするかを決めていった。また、いつもは保育教諭の問いかけに対して自分のイメージする世界が先行し、なかなか友達に上手く伝えられなかった N 児も「あじさいゴルフは(どう)?」と意見を出し、クラス全体から「面白そう!」と受け入れられた。その結果、全9種類のお店屋さんをすることになった。



あじさいまつりのお店屋さんを準備するにあたり、各グループで何が必要かを話し合っ

た。すると、「看板もいるよね」「何で作る?」「何個いるかな?」と必要な道具を出し合いながら内容が具体化されていった。また、お店が形になっていくにつれて「遊んでみよう!」と自分たちで遊びが始まったが、繰り返し遊んでいくと

「これ、小さい子たちには難しいんちゃう?」という声が上がりはじめた。あじさいヨーヨー釣りのグループでは「釣り竿の引っかけるところ変えた方がいいんちゃう?」「釣り竿の糸も絡まってるわ」「糸もダメやったんか〜」と上手いかなかったことを伝え合っていた。またあじさいゴルフのグループでは、ゴルフを提案した N 児がゴルフの穴(カップ)をどのように作るか悩んでいた。グループで相談してもなかなか意見が出なかったため、保育教諭がケンステップ(輪っかに矢印がついた運動用具)を穴に見立てることを提案した。しかし、E 児は「うーん、これだとボールは落ちない」とつぶやいた。E 児は平面ではなく立体で表現したいようだったので、長い段ボールを用意すると「それがいい!」と納得できたようだった。

あじさいまつりのプレオープン日として3歳児を招待した。初めてお店屋さんとしてオープンし、子どもたちも「いらっしゃいませ!」「こちら空いてますよ!」とお店屋さんになりきって遊んでいた。プレオープンが終わり、その日のうちに「今日のあじさいまつりで“上手くいったこと”と“困ったこと”はある?」と振り返った。すると、フォトスポットの係だった T 児から「小さいお友達に優しく教えてあげたら楽しんでくれて、笑っている顔を見ると私も幸せになりました」という声が聞かれた。また、あじさいボーリングの担当だった F 児からは「ピン(水入りペットボトル)が倒れへんかったからあんまり楽しくなかったかも」と困ったことを伝えてくれた。そのことについて、クラスで「どうやったら次は楽しめるかな?」と問いかけると「投げる場所を近くする」「ピンの中の水を減らす」という意見が出た。各グループで出た困りごとをもとに、あじさいまつりの本番に向けてさらに工夫する姿が見られた。

あじさいまつり当日は4歳児を招待し「忙しい」「大変だー」と声を漏らしながらも、たくさんのお客さんが来てくれたことで「めっちゃ大変やったけど、楽しかった」と充実感や達成感を得ることができた。そしてその日の振り返りでは、あじさいかくれんぼの担当だった B 児から「3歳が来た時は隠れる場所(ダンゴムシの制作物を隠すた



くじら組	らいおん組
あじさいヨーヨー釣り	あじさいゴルフ
あじさい輪投げ	あじさいボーリング
あじさいソフトクリーム	あじさいかくれんぼ
あじさいメモリーカード	あじさいゼリー
あじさいフォトスポット	

表1 あじさいまつりのお店屋さん



めの紙コップ)が4つだと簡単だったから、今日は8つにしたら楽しんでくれた」と、プレオープンの振り返りから修正して上手くいったエピソードを話してくれた。

〈子どもの姿からの読み取り〉

お店を作りあげ的过程中で子どもたちの“伝え合い”の場面が随所に見られた。クラス全体での活動となるとM児のように普段は自分の思いを伝えられない子どもも、グループという小集団になったことで自分の思いを伝えやすくなったと考えられる。また、あじさいゴルフを提案したN児は日々「虹色アジサイが好き」と自分で想像したアジサイの話をするが多かった。そのため友達から「虹色なんてないよ」と言われることもあったが、クラスでお店を決める際に、N児の保護者がゴルフをするという家庭での生活経験から「あじさいゴルフ」を提案したと考える。自分の気持ちが伝わって嬉しいと感じることは、今後の主体的な姿につながるのではないかと感じた。

また“あじさいまつり”に向けて、子どもたちが何度も試行錯誤をしている姿が見られた。はじめはグループ内で必要なものの準備について“伝え合い”、できたお店を一度「遊んでみよう」と自分たちで挑戦している。そして、プレオープンや当日でも思い通りにいかない課題にぶつかると、自分たちで「もっとこうしよう」という“伝え合い”が生まれていた。

〈保育教諭の思い〉

“あじさいまつり”の遊びの過程では、一見すると子どもたちが順調に準備をすすめ、自然と“伝え合い”が行われているように思われるかもしれない。しかし、子どもたちだけでは意見が出なかったり、まとまらなかったりすることもあった。その際に「どう思う?」「こんなものもあるよ」と子どもたちの“伝え合い”を支える言葉かけや関わりを行ってきた。また、準備に必要な素材についても園にある素材以外に、家庭で不要となった空き箱やゼリーカップを持ってきてもらい、子どもたちが相談し合いながら選べるようにした。そうすることで、新たな素材に出会い「これも使ってみようかな」と挑戦しやすい環境になり、準備としてではなく遊びとして楽しむことができたと感じる。

一方で、“あじさいまつり”までの時間的制約がある中で、当日に間に合うようにお店を作り上げることが目的になってしまい、子どもたちが上手くいかないことに気付いたりどのような素材を使うかを考えたりする時間を十分に確保できなかった。このことに活動の前半で気づき、後半からは上手くいったことや困ったことを振り返る時間を意識して取り入れたことで、子どもたちが試行錯誤しながらお店屋さんごっこを作り上げることや、異年齢の友達との関わりを楽しむことができた。

②にしくら からふるあじさいシアター

あじさいまつりをする事が決まると、子どもたちから今までアジサイについて知ったことや気付いたことを「西蔵こども園にいるみんなに伝えたい」という思いが生まれた。そこで、どうやって他の学年の友達に伝えるのかを話し合い“にしくら からふるあじさいシアター”として発表することにした。西蔵集会所の人や佃さんから教えてもらったことを言語化し、アジサイの特徴や気付いたことを身体表現やオリジナルの歌を通して伝えるなど、毎日遊びを積み重ねていった。

また、日ごろから保護者に「あじさいまつりって保護者も行っていいんですか?」「あじさいシアターの話をよく聞くんですけど見せてもらえますか?」という声が上がっていた。そこで、動画配信アプリを使って“にしくら からふるあじさいシアター”を配信することにした。



にしくらからふるあじさいどおり



IV 実践からの考察

今回の実践では、虫の世界に興味関心をもっていた子どもたちが前年度の5歳児とのつながりからツバメ、そしてアジサイへ興味関心が移り替わっていき、その過程で“伝えたい”や“やってみよう”という姿が多く見られた。以下では、西蔵こども園が考えた〈科学する心が育つ仮説〉を、実践から検証した結果を示すこととする。

仮説① “伝え合い”がより科学する心をスパイラルアップさせるのではないか。

新しい生活が始まった4月の頃は、見つけたことや気付いたこと、調べてきて分かったことを友達や保育教諭に伝え、それを受け止めてくれることが嬉しかった子どもたち。しかし、アジサイへの興味関心は子どもによって差があった。アジサイのことを知っていく中で「きれい」「不思議」と素直に感じる科学する心が揺れ動き、次第にみんなの興味関心がアジサイへと向かっていった。なかでも、誰もいない旧新浜保育所で元気のないアジサイと出会った経験は、これまでの“自分の好きなアジサイ”のことを“伝えたい”という思いから「さみしそう」「かわいそう」とみんなの気持ちが“旧新浜保育所のアジサイ”へと向いたことで「ここに住もうよ」「連れて帰ろう」と“伝え合い”に変わっていったと考えられる(事例13)。

また、“伝えたい”や“伝え合い”などの“伝える”行為は「トキメキ ヒラメキ キラメキ(みつけて、かんがえて、やってみよう)」の随所に出てくると仮説を立てた。例えば「トキメキ」ではアジサイを継続的に見ることでアジサイの特徴に気づき(事例3、4)、聞いたり調べたりしてアジサイのことを知ったこと(事例5、10、11)を“伝える”姿が見られた。「ヒラメキ」では、まだ蕾のアジサイを見て「何色の花が咲くかわかったよ」という予想(事例3)や、枯れたアジサイがもったいないからと「色水につけたら花びらの色が戻るんじゃない?」という方法の提案(事例17)を“伝える”姿が見られた。そして「キラメキ」では、西蔵集会所がもともと牧場だったことに驚き(事例5)、2つのアジサイの感触の違いに感動したこと(事例16)を“伝える”姿が見られた。これらの事例を踏まえると、“伝える”という行為は「トキメキ ヒラメキ キラメキ」の随所に見られ、さらには「トキメキ ヒラメキ キラメキ」の各段階でその行為の内容が異なると考えられる。

最後に、“伝える”という行為は子どもの気づきや思いなどの科学する心を言語化するコミュニケーションの方法としてだけでなく、“伝える”ことによって聞いていた友達も「そうだったんだ!」とその科学する心が伝播していく。例えば、事例10のようにB児が「アジサイの蕾から出ているツノは、本当のお花なんだよ」と伝えたことで、他の子どもたちも嬉しくなり、友達や保護者に伝える姿があった。また、あじさいまつりでは小さい友達ももっと楽しめるようにするためにはどうすればいいのか、クラスで“伝え合い”をしたことで、釣り竿やボーリングのピンを工夫するアイデアを知るきっかけになった。このように、“伝え合い”は新たな「科学する心」との出会いのきっかけになり、それを繰り返すことで科学する心が育っていくと考察した。

仮説② 疑問から挑戦しようとする気持ちが科学する心を育てるのではないか。

今回の実践では、アジサイに興味をもつことで様々な疑問が生まれた。その疑問を友達や家族、保育教諭と共有し共感してもらうことで一層興味が深まっていった。事例7までの様々なアジサイに出会った経験から興味が膨らみ、事例7の精道こども園でのアジサイ発見をきっかけに子どもたちの科学する心が動き、挿し木やコンポスト(事例11、14)などの「レッツチャレンジ」に繋がったと考えられる。また、挑戦には上手くいくことばかりではなく、上手くいかないことも経験した。どちらも子どもたちの心にはキラメキが生じ、上手くいった時には自信・喜び・充実感となってさらなるトキメキへとスパイラルアップしていく。また、上手くいかなかった場合でもそこで終わるのではなく「どうやったら上手くいくのか」「こうしてみてもどうか」と伝え合いながら次へのヒラメキへと繋がり、キラメキへと向かっていく。この「レッツチャレンジ」という挑戦が遊びや友達との繋がりを深め、科学する心を育てていくと感じた。さらに、保育教諭や保護者も子どもたちの気づきや疑問と一緒に驚き感動し、そして考えながら“共主体”となって活動を進めたことで子どもたちの科学する心をより育めたと考える。

V まとめと今後に向けて

① 2023年度の論文の課題より

毎日の遊びの様子を知らせることで、保育内容が家庭にも伝わっていると思い込んでいたが、楽しみながら何を感じさせたいか、学ばせたいかという教育・保育目標を各家庭に浸透させることは難しいと感じた。今後、保護者にどのような方法で、リアルタイムに活動のねらいや内容を伝えていくかということが課題である。
(2023年度 論文より)

ということから、今年度はアジサイについて知ったことを子どもの発信から家庭で共有するだけでなく、保護者参加型参観を企画した。(事例8) その参観後の保育から、以下のような感想が述べられた。

<参観後のアンケートから>

- ・私はせいぜい「青いアジサイが咲いているね」など、色くらいしか見ていないのに、子どもたちの観察する力に驚きました。
- ・アジサイもあの目線では見たことがなかったから、親も勉強になりました。
- ・グループでの話し合いでは、リーダーシップを発揮する子、真剣な表情で考える子、静かに見守る子など個性が表れていました。自分の意見を言ったり、人の話を聞いたりできるようになっている姿に成長を感じました。
- ・大人も驚くほど、子どもたちが熱心に探究[□]していて感心しました。「自分たちで考えて、チャレンジして検証してみる」ことはこれから大きくなっていく子どもたちの土台になると思います。

子どもから聞く話で感動することよりも、保護者自身も自ら感じ、知ることの楽しさを味わい、今まさに子どもたちが受けている保育の楽しさをリアルタイムに感じられたことは今年度の成果である。今後も年に数回しかない貴重な参観日の保育内容を吟味して実践していきたい。

② 保護者が探究心に着目していること

アジサイの名前や種類を知り、アジサイをどんどん好きになっていく子どもたちが、園で知ったことを嬉しそうに帰り道や家庭で話す姿から、アジサイのことについて親子で感動を共有することができた。保護者も「アジサイにこんな種類があるなんて知りませんでした」と驚き、アジサイに興味をもつ方が増えたことはアンケートからも実証されている。子どもたちと同じように、アジサイの不思議さや面白さを実感した保護者から「にしくらあじさいプロジェクト」後のアンケートで以下のような感想が述べられた。

<保護者アンケートより>

- ・この1学期間は、とても意欲的に園の生活を楽しんでいました。今まで植物や生き物に興味がなかった娘もこれは何だろうなど自分で調べたりする姿が多く見られた日々でした。
- ・単に感じるだけでなく「それならこうしてみよう」「やってみよう」と次への気持ちも育っていると感じます。
- ・子どもから日々聞く話の中には「へえ」と驚くことも多く、たくさんの方に興味関心をもち学ぶ姿が印象的だった。子どもの「何で？」が多く、その度に「何でやろうな～？」と、母の中ではあまり疑問に思ったことがないことでも、子どもは素直に知りたいと思う探究[□]心はすごいと感じた。その探究[□]心を深めることができるように、家庭でも一緒に調べたり考えたりしたいと思った。
- ・みんなで作ったアジサイの歌やアジサイの作品を園中に飾ったりカラフルあじさい祭りをしたり、色々な角度から楽しいアプローチによって興味関心、探究[□]心が深まった素晴らしいプロジェクトでした。
- ・アジサイのことで本人は大きく成長したと思う。かなり言葉が増え、本人が思っていることを本人の言葉でたくさん話してくれた毎日でした。興味をもったことに対しては、強い吸収力があると思えた。
- ・細かなことに気付くようになりました。また「聞く」から「考えて、調べる」ことへと発展しました。例えば家で育てているオクラの葉っぱに無数の透明な卵があることに気付き、タブレットで写真を撮り「調べて」と言ってきました。それは卵ではなく、ネバネバ成分ムチンと知り喜び「オクラは汗をかくんだね！」と家族に教えて回っていました。“不思議”を楽しんでいるようです。
- ・1つのテーマを深く掘り下げて取り組むことの楽しさ、その過程における不思議に思う気持ち、疑問を解明するために人に教えてもらう大切さを成長とともに感じました。

以上のことから今回のあじさいプロジェクトで、保護者が子どもの興味関心の奥にある探究[□]心の育ちに着目していることがわかった。そのことは言い換えれば、西藏こども園で行っている教育保育や、大事にしていることが子どもの姿を通して伝わっているということではないか、また子どもの目指すべき姿が、保護者と共有できていることではないかと考える。

しかしその一方で、課題も見えてきた。それは、昭和、平成～令和の時代に保育をしてきて、常に「心で感じること」「感じたことを言葉や体、様々な方法で表現する楽しさを味わわせること」を大切にしてきた。2019年に芦屋市にタブレット端末が導入され、当初は ICT 機器を使う教育保育に対して身構えていた。しかし導入されて6年目になり、昨今 ICT 機器を使うことが日常的になり、ICT を使う是非論からどう使うかという方法論に変化してきた。

今回の取り組みでは、ICT 機器を使ってアジサイについて「より気付かせよう」「より見つけさせよう」と気負い視覚的なことにとらわれすぎて、その他の四感（聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を大切に保育するという意識に欠けていたことが大きな反省である。このことは、ICT 機器を使って保育する怖さでもあるということを肝に銘じておきたい。今後どのような道具を使って保育することになっても、今まで大切にしてきたものをなくさないように「変化と不易」の視点を常にもち、心で感じる保育を忘れてはいけない。

現代の複雑な社会では、課題を自ら感じ取り、人々とのコミュニケーションを介して解決に向けた情報を得て、リーダーシップを発揮しながら柔軟に行動する人間力が求められている。西蔵こども園では、令和4年度から、思わず心がうごきだす ～みつけて、かんがえて、やってみよう～を教育保育目標として取り組んできた。今年度はその目標に加え「見たい 知りたい 伝えたい」と「レッツチャレンジ」をテーマにアジサイの活動に取り組む中で、子どもも大人も「知りたい」気持ちが強くなり、また知ったことや感じたことを「伝えたい」と思いが膨らんでいった。またその“伝えたい”が5歳児では“伝え合い”に発展していく。その“伝え合い”が科学する心をくすぐり深めていくことを、今回のあじさいプロジェクトで実感した。

そして今回のあじさいプロジェクトは、高等学校までつながる探究学習と似ていることが分かった。文部科学省では、VUCA（予測困難で不確実）の時代に探究の普及は欠かせないと述べている。なぜかというところ、

- ・未知の課題に対応するには、指示待ちではなく自分で考える人（大人も含めて）が大切である。
- ・これからの時代は終身雇用が崩壊したり、AI が台頭したり、デジタル化やグローバル化が進んだりと様々な変化が起こりうる

そのような社会情勢の中でもたくましく生きていくためには、

①自分なりに問いを立てる（探究の一步） ②情報を集めて分析する ③まとめて発表することが大切である。情報を整理し、自分の考えをまとめアウトプットすることが、変化の大きい時代の中で行動を起こす基礎となるからだ。

西蔵こども園のような就学前施設から小学校、中学校、高等学校、ひいては大人になっても、

課題設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現という探究（知的営み）を楽しめる人になってほしい。

そのためには「伝えたい」気持ちから始まる「伝え合い」の保育を、様々な角度（興味）から積み重ね、今後も実践していきたい。

引用文献

・2023年度 ソニー幼児教育支援プログラム「“そうだったんだ”から深まる 子どもたちの探求心」
兵庫県芦屋市立西蔵こども園

研究代表者名 泉 美由紀
執筆者名 佐藤 敦子 安田 達子 竹本 翔
研究協働者 大前 万紀子 小南 瑞歩
長原 汐里

